

る、つまり発見ということになるのだろう。しかし、カラ格との共起によって、必ずしも「さがす」が発見の意を含意しているとは限らず、(79)はいえる。

ところが、(76)(77)を較べると、カラ格と完了テンスの共起によって、「さがす」に発見の意が含まれることが、明らかになる。(77)は、「さがす」が完了テンスをとっても、これだけでは発見の意が含意されないの、自然な文となる。それが、これにカラ格が共起すると、(78)のように言えなくなる。これは、カラ格と完了テンスの共起により、「さがす」に結果である「発見」の意が含意されるためである。

以上、「さがす」についてのみ考察を行ったが、同様なことが「さぐる」についても言える。

このように、「さがす」「さぐる」は、文末表現、副詞句、共起する格、完了テンス等の影響により、動作の目的である「発見」をも含意するようになる。しかし、これはあくまでも、上記のような種々の要素の影響によるものであり、両語の本来的な意味は、動作の経過のみを問題とし、結果については関与していない。

### 3. まとめ

「さがす」と「さぐる」の意味の違いについての考

察を以下にまとめる。

さがす：求める対象の存在位置を発見しようとして行動すること。

さぐる：不可視で、通常手や足で触れられる形を持った無生物である対象の存在位置を発見しようとして、手や足などの触覚のみを使い、対象が存在すると思われる範囲を触れてたどっていくこと。または、不可視で、形を持った無生物である対象そのものに手や足で触れ、対象の形にそってそれをたどることで、全体の外形を明らかにしようとする。または、抽象的な対象に潜在的に備わる内容を、顕在化している手がかりを丹念にたどっていくことで、明らかにしようとする。

<注1> 柴田編1976, p. 34

<注2> 同, p. 30

<注3> 同, p. 31

<注4> 国研1972, p. 220

言語経歴：1958年1月 愛知県刈谷市生  
0歳～23歳 愛知県知立市  
23歳～ 東京都目黒区

## はなれる・はずれる・とおざかる

杉本 武

### 1. はじめに

本稿で取り上げる動詞のうち「はなれる」と「とおざかる」は、国立国語研究所1964では、共に「2.156 隔離」に分類されており、類義関係にあるとみられる。

(1) 車が 町から はなれる。

(2) 車が 町から とおざかる。

この一方、国広編1982でも述べられているように、「はなれる」は「はずれる」とも共通した点を持つ。

(3) 人工衛星が 軌道を はなれる。

(4) 人工衛星が 軌道を はずれる。

しかし、「はなれる」と「はずれる」とでは、置き換えのできない場合、できても意味の大きく異なる場合が多く、その類義関係は遠いとも考えられる<sup>(注1)</sup>。また、「はずれる」と「とおざかる」は、さらに類義関係が遠いと考えられる。

本稿では、「はなれる」「はずれる」「とおざかる」の三語を分析するが、類義関係の点から、「はなれる」

に中心を置くことにする。

### 2. 統語的特徴

#### 2.1. 構文

まず、「はなれる」がどのような構文で用いられるかをみてみよう。

(5) 部隊が 危険地帯から はなれる。

(6) 飛行機が 空港を はなれる。

(7) 太郎が 次郎と はなれる。<sup>(注2)</sup>

(8) 太郎と次郎(と)が はなれる。<sup>(注3)</sup>

上の例から、「はなれる」は、次のような構文で用いられることがわかる。

(i) はなれる / NP<sub>1</sub>ガ  $\left\{ \begin{array}{l} \text{NP}_2 \text{カラ} \\ \text{NP}_2 \text{ヲ} \\ \text{NP}_2 \text{ト} \end{array} \right\}$  \_\_\_\_\_

NP<sub>1</sub>トNP<sub>2</sub>(ト)ガ \_\_\_\_\_

次に、「はずれる」は、「はなれる」と同様に、カラ

格名詞句、ヲ格名詞句と共に起し得る。

(9) 窓が 窓枠から はずれる。

(10) ミサイルが コースを はずれる。

しかし、ト格名詞句と共に起することはできない。

(11) \*窓が 窓枠と はずれる。

(12) \*窓と窓枠(と)が はずれる。

したがって、「はずれる」の用いられる構文は次のようになる。

(iii) はずれる / NP<sub>1</sub>ガ { NP<sub>2</sub>カラ }  
NP<sub>2</sub>ヲ

さらに、「とおざかる」の場合は、カラ格名詞句としか共起し得ない。

(13) 彗星が 地球から とおざかる。

(14) \*彗星が 地球を とおざかる。

(15) \*彗星が 地球と とおざかる。

(16) \*彗星と地球(と)が とおざかる。

したがって、「とおざかる」の用いられる構文は次のようになる。

(iii) とおざかる / NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>カラ

以上を構文中心にまとめると次のようになる。

(iv) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>カラ

「はなれる」「はずれる」「とおざかる」

(v) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ

「はなれる」「はずれる」

(vi) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ト

NP<sub>1</sub>トNP<sub>2</sub>(ト)ガ

「はなれる」

このうち、(vi)のような構文は、「はなれる」に限られるので、4.2.で別個にみることにする。

また、(v)のような構文は、「はなれる」「はずれる」でも自由にとれるわけではない。

(17) \*先生が 太郎を はなれる。

(18) \*バッジが 襟を はずれる。

これは、次のように、「を」を「から」で置き換えた文と対照的である。

(19) 先生が 太郎から はなれる。

(20) バッジが 襟から はずれる。

また、(14)でみたように、「とおざかる」はヲ格名詞句とは共起できない。このような「から」と「を」に関する問題は、4.1.で扱うことにして、それまでは、必要のない限り、「から」の例を挙げることにする。

## 2.2. 自動詞・他動詞の対応

「はなれる」「はずれる」「とおざかる」は、それぞれ他動詞形「はなす」「はずす」「とおざける」を持つ。

(21) 手が ハンドルから はなれる。

(22) ドライバーが 手を ハンドルから はなす。

(23) レーシングカーが コースから はずれる。

(24) レーサーが レーシングカーを コースからはずす。

(25) やじ馬が 現場から とおざかる。

(26) 警官が やじ馬を 現場から とおざける。

これらの場合、自動詞と他動詞は「対応」していると言える。<sup>(注5)</sup>ところが、次のような文をみていただきたい。<sup>(注6)</sup>

(27) 張込みの刑事が 持場を はずす。

(27)では、「はずれる」の他動詞形「はずす」が用いられているが、「持場」が直接目的語であるかどうかは問題である。「持場」が直接目的語であるとする、(27)には(28)のような対応する自動詞文があるはずであるが、(28)は非文である。

(28) \*持場が はずれる。

この一方で、(27)の「持場」は、直接目的語ではなく、「移動格」(cf. 奥津1967b)の名詞句であるとする、この場合「起点」を表わすので、「を」を「から」で置き換えることができるはずであるが、(29)はやはり非文になる。

(29) \*張込みの刑事が 持場から はずす。

しかし、(27)を使役文にすると、「を」を「から」で置き換えられるようになる。

(30) 彼が 張込みの刑事を 持場から はずさせる。

同様のことが(31)についても言える。

(31) 山田氏が 会合の席を はずす。

(32) \*会合の席が はずれる。

(33) \*山田氏が 会合の席から はずす。

(34) 社長が 山田氏を 会合の席から はずさせる。

このことから、(27)(31)のヲ格名詞句は、直接目的語ではなく、移動格名詞句であるということもあながち否定できない。<sup>(注7)</sup>仮にこのように考えると、(27)(31)の「はずす」は自動詞であるとも言えるが、主語(この場合「動作主」を示す)と直接目的語(この場合「対象」を示す)が一致しているとも考えられ、他動詞とも言える。つまり、例えば(27)は、「張り込みの刑事が自分を持場からはずす」とパラフレーズできるのではないだろうか。この点で、この場合の「はずす」は再帰的であると言える。この問題については、まだ疑問が残るが、(27)(31)のような「はずす」の用法をひとまず「再帰的用法」と呼ぶことにする。

## 2.3. 状態的用法

国広編1982では、「はなれる」と「はずれる」には、「動的動詞の静的用法(同上書, p. 31)」があることが指摘されている。

(35) そのレストランは 町を はなれた所(注8)にあった。

(36) そのレストランは 町を はずれた所(注9)にあった。

この用法は、国広編1982でも述べられているように、「あたかも場所のように本来は動かないものが移動した結果であるかのようにとらえて位置関係を示す一種の表現法(p. 31)」である。このような用法を、本稿では、「状態的用法」と呼ぶことにする。これは、次のような状態を表わす「～ている」の用法と通ずるものであるからである。

(37) その場所は 町から はなれている。

(38) その場所は 町から はずれている。

ところが、「とおざかる」の場合、このような状態的用法は若干不自然なようである。

(39) ?電車は 駅から とおざかった所にとまっている。

(40) ?その場所は 駅から とおざかっている。

## 3. 意味的特徴

### 3.1. 「はなれる」と「はずれる」

1.でもふれたように、「はなれる」と「はずれる」とでは、置き換えのできない場合が多い。まず、次のような文をみてみたい。

(41) 張込みの刑事が 持場から はなれる。

(42) \*張込みの刑事が 持場から はずれる。

(43) 警備員が 詰所から はなれる。

(44) \*警備員が 詰所から はずれる。

(45) 秘書が 部屋から はなれる。

(46) \*秘書が 部屋から はずれる。

国広編1982では、「はずれる」の意義素として、「<物が、固定されていることが期待されている場所に固定していない状態になる>(p. 36)」というものが仮定されている。しかしながら、この意義素によっては、(42)(44)(46)の不適合性は説明できないであろう。例えば(42)の場合、「張込みの刑事」は、「持場」についていることが必要なので、「固定されていることが期待されている」と言えないだろうか。「持場」についていることは「固定」ではないと言えるかもしれないが、次のような場合とさほど違いはないと思われる。

(47) 飛行機が コースから はずれる。

あるいは、「はずれる」のガ格には〔+animate〕の名詞句はたたないと考えられるかもしれない。ところが、次のような文はどうであろうか。

(48) 鈴木氏が 役員から はずれる。

しかし、(48)のような文は比較的限られており、「誰かがあるグループからまれる」というような特定の意味でしか用いられないようである。したがって、(48)のような文は、例外とすべきかもしれない。しかし、ここで特筆すべきことは、(48)が意志的動作を表わさないと(注9)いうことである。したがって、次の文は不適格である。

(49) \*鈴木氏が 後進に道をゆずるために 役員から はずれる。

このことから、(42)(44)(46)が不適格なもの、「はずれる」が意志的動作を表わさないためではないかとも考えられる。

さらに、これと関連するのは、2.2.で取り上げた「はずす」の「再帰的用法」である。(42)(44)(46)によって生じた穴は、次のように、「はずす」の再帰的用法で埋められる。(注10)

(50) 張込みの刑事が 持場を はずす。

(51) 警備員が 詰所を はずす。

(52) 秘書が 部屋を はずす。

この場合、「はずす」は意志的動作を表わしていると考えられる。

(53) 張込みの刑事が 交替するために 持場を はずす。

(54) 警備員が 休憩をとるために 詰所を はずす。

(55) 秘書が 来客を迎えるために 部屋を はずす。

以上のような「はずれる」の無意志性とは反対に、「はなれる」は意志的動作を表わし得る。

(56) 張込みの刑事が 交替するために 持場から はなれる。

(57) 警備員が 休憩をとるために 詰所から はなれる。

(58) 秘書が 来客を迎えるために 部屋から はなれる。

また、無意志的な動作も表わし得る。

(59) 流木が 岸から はなれる。

(60) 針が レコードの盤面から はなれる。

(61) ヘリコプターにつり上げられて 遭難者の体が 地面から はなれる。

以上、(42)(44)(46)の不適合性に関連した問題をみてきたが、この不適合性をどのような形で処理するかは問題

である。仮に、カ格名詞句の animacy によって説明するとなると、(48)の扱いが問題になる。また、無意志性によるとしても問題がある。(42)の場合、「張込みの刑事」が誰かに襲われて失神し、連れ去られたというような状況でも不適格であろう。この場合、無意志的な動作ではないだろうか(ちなみに、このような状況では、「はずす」の再帰的用法の(50)も使えない)。このことから、(48)は例外的な用法とし、カ格名詞句の animacy によった方がよさそうであるが、不明確な点もあり、結論は差し控えたい。しかし、いずれにしても、(42)(44)(46)の不適格性の説明のためには、国広編1982の記述にさらに付け加える形での記述が必要になるわけであり、国広編1982の記述への直接的な反例にはならないだろう。

さて、次に、次のような文をみてみたい。この場合、「はなれる」でも「はずれる」でも適格であろう。

- (62) 馬をつないでいたロープが 杭から はなれる。  
(63) 馬をつないでいたロープが 杭から はずれる。  
(64) ネジが シャーシから はなれる。  
(65) ネジが シャーシから はずれる。  
(66) 車輪が レールから はなれる。  
(67) 車輪が レールから はずれる。

ところが、以上の文で、「はなれる」と「はずれる」とでは、異なった状況を表わす。まず、(62)は、「杭」に結ばれていない「ロープ」の端が「杭」のそばに落ちていて、その端が「馬」の移動につれて移動することを表わすのに対して、(63)は、「ロープ」が「杭」からほどけることを表わす。次に、(64)は、「ネジ」が「シャーシ」から抜けずに、「ネジ」の頭が「シャーシ」から浮き上がることを表わすのに対して、(65)は、「ネジ」が「シャーシ」から抜けることを表わす。また、(66)は、電車が何かに乗り上げるなどして、「車輪」が「レール」から浮き上がることを表わすのに対して、(67)は、「車輪」が横にずれて脱線することを表わす。<sup>(注11)</sup>

ここで、なぜ「はなれる」の場合の状況で「はずれる」が使えないのかということと、なぜ「はずれる」の場合の状況で「はなれる」が使えないのかということの二点が問題になる。まず前者からみてみよう。(62)(63)の場合、国広編1982の記述で問題はないだろう。「はなれる」の場合の状況は、単なる移動で、固定の解除ではないからである。また、(65)の場合、抜けずに単に「ネジ」の頭が浮き上がるだけでは、固定の解除にならないわけで、これも問題にはならない。なお、(64)の

「はなれる」の場合、「ネジ」に「ネジの頭」という読み込みがあるのだろう。

次に、(66)(67)と比較して、次の文をみていただきたい。

- (68) タイヤが 地面から はなれる。  
(69) \*タイヤが 地面から はずれる。

(68)は、(66)と同様に、自動車が何かに乗り上げるなどして、「タイヤ」が「地面」から浮き上がってしまうことを表わす。(67)の場合、<sup>(注11)</sup>で述べたように、(66)と同じく「車輪」が浮き上がったような状況でも話者によっては認めるであろうが、(69)の場合は全く認められないであろう。(69)の不適格性は、「タイヤ」と「地面」とが単に接触しているだけで、固定されていないためであろう。「はずれる」の場合、「はずれる」前に、基本的には、固定なり嵌合なりしていることが必要である。したがって、次の文は、「机」が単に置いてあるのではなく、固定されていなければ、不適格である。

- (70) 机が 所定の位置から はずれる。

ところで、(67)はどうであろうか。「車輪」と「レール」は、その形状から、横方向には固定されているが、縦方向には固定されていないとも言える。そのため、「車輪」が浮き上がった場合に使えるか否かに、話者によってゆれが出るのであろう。

さて、次に、(62)~(67)でなぜ「はずれる」の場合の状況で「はなれる」が使えないのかをみてみたい。(62)(64)(66)で共通するのは、「はなれる」前に、カ格名詞句で指示されるものがカラ格名詞句で指示されるもの・場所に固定されていないことである。(64)の場合、「ネジ」の頭自体は、「シャーシ」に接触しているだけで固定はされていない。また、(66)の場合も、先述したように、縦方向には固定されていないとみなし得る。これに対して、先にもみたように、(63)(65)(67)の場合、カ格名詞句で指示されるものは、カラ格名詞句で指示されるもの・場所に固定されている。このことから、「はなれる」の場合、事前に固定されていないと言えそうである。しかし、これには精査が必要である。

例えば、次のような場合、事前の固定があり、その固定の解除がなされているとは言えないだろうか。

- (71) 木にまきついていた蛇が その木から はなれる。  
(72) 太郎が しがみついてくる次郎から やつと のことで はなれる。

特に(71)は、(72)との関連が注目されよう。ところが、次の文はどうであろうか。

- (73) 捕虜が ゆわえつけられていた木から はな

れる。

この場合、一度縛めを解いてから移動することしか表わさないだろう。以上の点と関連して、次の文をみていただきたい。

(74) 手が ハンドルから はなれる。

(75) 手が ハンドルから はずれる。

(75)の場合、かなり強く「ハンドル」を握っていないと不自然であろう。以上のことから、「固定」とはどのような範囲のものなのか、あるいは「固定」と「接触」とはどう違うのかということが問題であると推測される。すなわち、(71)(72)(74)の場合、固定があるとはみなされないのではないかとということである。この問題についてはまだ不明瞭な点もあるが、「はなれる」と「はずれる」とには、「接触」と「固定」の違いがあるだけしておきたい。ただ一つ付け加えておきたいのは、「固定」と「接触」には重なる部分があるということである。例えば(74)の場合、かなり強く「ハンドル」を握っていても適格な文であろう。また、次のような場合にも重なりがあることになる。

(76) 人工衛星が 軌道から はなれる。<sup>(注13)</sup>

(77) 人工衛星が 軌道から はずれる。

なお、「はなれる」の場合、接触していなくてもかまわないことは言うまでもない。

(78) そばにいた子供が 驚いて 太郎から はなれる。

このような状態を「近接」と呼ぶことにする。これについては、次節でみることにする。

ところで、国広編1982によると、「はずれる」の場合、あるものがある場所に固定されていることが期待されていなければならない。ところが、次のような場合はどうであろうか。

(79) 行く手をふさいでいた鉄格子が 壁から はずれる。

この場合、固定されていることは期待されているのだろうか。もともと、国広編1982の記述は、誰が期待するのか明らかではない。(79)の場合、「鉄格子」を取り付けた人間は、固定されていることを期待しているが、そこを通ろうとする人間は、それを期待していないのではないだろうか。さらに、次の文は、中身を出すために、「栓」が取り除かれた場合にも使える。

(80) 瓶の栓が はずれる。

この場合、かえって、固定されていないことが期待されている。したがって、少なくともこのままでは、国広編1982の記述は疑問が残る。

国広編1982は、「はずれる」の場合、固定されてい

ることが期待されていることを示す例として、次のような文を挙げている (p. 31)。<sup>(注14)</sup>

(81) \*ボートは 岸を はずれた。

(82) \*私は 故郷を はずれた。

ところが、(82)の不適格性は、(42)(44)(46)と同様にして説明される。また、(81)の場合も、固定されていることが期待されているかどうかははっきりしない。例えば、絶海の孤島に「ボート」で渡り、それが流されてしまわないようにつないでいたような状況では、固定されていることが期待されていると言えないだろうか。そのような状況でも、(81)は不適格であり、この不適格性には、先の「固定」の問題が関与していると思われる。つまり、(81)では、「ボート」自体は「岸」に固定されていないで、ロープなどが「岸」に固定されているのである。(81)を次の文と対照されたい。

(83) 非常用のボートが 台から はずれる。

したがって、固定されていることが期待されているという特徴の存在は疑わしい。

それでは、これに代わる特徴はあるのだろうか。国広編1982は、「固定された状態で何らかの働きをする (p. 30)」ということも言っている。これは、(79)(80)をうまく説明する。しかし、次のような場合はどうであろうか。

(84) 消火器が 壁から はずれる。

(85) 洋服にひっかかっていた釣針が はずれる。

(84)は、「消火器」を使用するために固定が解除された場合にも使える。この場合、もとの働きとは何なのだろうか。これは、(83)の場合も同様である。さらに、いずれの場合でも、「はずれる」ことで、本来の働きをする。また、(85)の場合、「釣針」は固定された状態では何の働きもしない。ちなみに、どの場合でも、固定されていることは期待されていない。

以上から、先のような特徴も不要なのではないかと思われる。仮に、個々の場合に、固定されていることが期待されていることや、固定された状態で何らかの働きをすることが含意されていても、それは、一次的に「はずれる」に帰せられるべきものではなく、二次的なものではないかと思われる。つまり、わざわざ「固定」されている以上、固定されていることが必要であり、期待されていたり、何かの機能を果たしたりしていることが現実として多いのではないだろうか。「接触」と異なり、「固定」というのはかなり意図的な状態である。しかし、必ずしも意図的である必要はない(85参照)。

以上の議論から、「はずれる」の意義素としては、

次のもので十分であろう。<sup><注15> <注16></sup>

(vi) 「はずれる」: <あるものがあるもの・場所  
に固定されていない状態になる><sup><注17></sup>

### 3.2. 「はなれる」と「とおざかる」

「はなれる」と「とおざかる」については、国立国語研究所1972に比較をもとにした記述がみられる。ここでは、両語の違いとして、次の二点が指摘されている。一つは、「はなれる」の場合、「接触をうしなう」ことに重点があるが、「とおざかる」の場合、事前の接触の有無はいつでもよいということである(同上書, p. 298)。もう一つは、「はなれる」は、「遠い距離の移動」にも「近い距離の移動」にも使えるが、「とおざかる」は、「遠い距離の移動」にしか使えないということである(同上書, p. 299)。なお、ここでいう「距離」とは移動後のへだたりのことである。

まず、事前の接触の有無についてみてみたい。国立国語研究所1972では、「とおざかる」の場合、事前の接触の有無はいつでもよいとされていたが、これは妥当であろうか。

- (86) 敵が 射程距離から はなれる。
- (87) 敵が 射程距離から とおざかる。
- (88) 暴徒が 建物から はなれる。
- (89) 暴徒が 建物から とおざかる。

ここで、(86)の場合、「はなれる」前は、「敵」は「射程距離」の中にいたと考えられる。また、(88)の場合、「はなれる」前は、「暴徒」は「建物」の中かそばにいたと考えられる。これに対して、(87)の場合、「とおざかる」前は、「敵」は「射程距離」の中にはおらず、(89)の場合、「暴徒」は「建物」とある程度距離をおいていたと考えるのが普通ではないだろうか。つまり、「とおざかる」の場合、移動前の接触・近接がないのではないだろうか。そのために、次の文は若干不自然になるのではないだろうか。<sup><注18></sup>

- (90) 目の前にいた敵が 射程距離から はなれる。
- (91) ?目の前にいた敵が 射程距離から とおざかる。
- (92) 建物の中にいた暴徒が 建物から はなれる。
- (93) ?建物の中にいた暴徒が 建物から とおざかる。

ただ、ここで注意したいのは、現実の上で事前の接触・近接があることと、言語表現としてそれを含むことを区別すべきことである。例えば次の文で、ある時点で接触・近接があったとしても、言語表現としては、接触・近接が既になくなった時点からの過程を表わし

ていると考えられることである。

- (94) 列車が 始発駅から とおざかる。
- また、(98)の不自然さも注目される。
- (95) 子供が バンダの檻から はなれる。
  - (96) 子供が バンダの檻から とおざかる。
  - (97) 子供が バンダの檻のそばから はなれる。
  - (98) ?子供が バンダの檻のそばから とおざかる。
- (97)(98)の場合、「そば」によって事前の近接性が強調されるので、「とおざかる」は不自然になるのではないだろうか。

以上のことについては、更に検討が必要であるが、これ以上立ち入らず、4.1.で関連した問題について述べることにする。

次に「はなれる」であるが、国広編1982では、その意義素として「くものが他のものとの間の距離が大きくなるように動く」(p. 36)というものが挙げられており、事前の接触・近接の存在については何も言われていない。しかし、(86)(88)から示唆されるように、「はなれる」の場合、事前の接触・近接が必要ではないかと思われる。さらに、次の文をみていただきたい。

- (99) すぐ前を走っていた車が 太郎の車から はなれる。
- (100) \*50メートル先を走っていた車が 太郎の車から はなれる。
- (101) 太郎のそばに立っていた男が 太郎から はなれる。
- (102) \*道の随分先に立っていた男が 太郎から はなれる。

このように、移動前に既にある程度の距離がある場合、「はなれる」は使えないようである。しかし、これがどの程度の距離であるのかは、客観的に規定できないものであるため、明確ではない。これについてはこれ以上追求せず、本稿では、ある程度の距離内を「近接」と呼ぶことにする。したがって、前節でみたように「接触」の場合もあるので、「はなれる」の場合、事前の接触・近接が必要だということになる。そこで、国広編1982の記述にさらにこの特徴を加える必要がある。ただし、これを除いても、単に「距離が大きくなるように動く」ではなく、「移動して接触・近接していない状態になる」というようにした方がよいようである。まず、この線で意義素をまとめておこう。

- (vi) 「はなれる」: <あるものが移動して、ある  
もの・場所と接触・近接していない状態になる><sup><注19></sup>
- まず、このように考えると、次のような抽象的用法における「はなれる」と「とおざかる」の意味差をう

まく説明できる

- (103) 山田氏が 第一線から はなれる。
- (104) 山田氏が 第一線から とおざかる。
- (105) 太郎が 次郎の家庭から はなれる。
- (106) 太郎が 次郎の家庭から とおざかる。

上の文で、「はなれる」の場合、「山田氏」と「第一線」、「太郎」と「次郎の家庭」の関係がなくなることを表わすが、「とおざかる」の場合、単に関係が疎遠になることを表わす。このことは、次のように、「はなれる」と「はずれる」とで置き換えるのできない例についても言える。

- (107) 子供が 親の手を はなれる。
- (108) ツキが はなれる。
- (109) 足が その店から とおざかる。
- (110) 危険が とおざかる。

つまり、「とおざかる」の場合、単に抽象的な距離が開くことを表わしているが、「はなれる」の場合、抽象的な接触・近接という事前の状態が否定されることを表わしている。したがって、(106)のような意義素の方が抽象的用法と直結させやすい。もちろん、(106)は具体的用法にも支障をきたさない。

さらに、(106)は、「はなれる」の状態的用法も説明することができる。状態的用法は、過程を無視して、その結果の状態のみを表現する用法である。(106)に従えば、結果の状態とは「接触・近接していない状態」である。2.3.でみた用例は、まさにこのような意味を表わしている。

これに対して、「とおざかる」は、単にへだたりが以前よりも大きくなることを表わすために、抽象的用法では、抽象的なへだたりが大きくなることを表わすのであろう。

さて、次に、移動後のへだたりの問題であるが、「はなれる」の場合、接触・近接していない状態になれば、その大小は任意であらう。ただし、次の文の不適合性は注目される。

- (111) \*飛行機が はるかかなたに はなれる。
  - (112) 飛行機が はるかかなたに とおざかる。
- 類例は見当たらないが、これは、接触・近接していない状態になるよりもへだたりが大きすぎるためなのかもしれない。

では、「とおざかる」の場合はどうであろうか。国立国語研究所1972も言うように、へだたりは大きくなくてはならないようである。

- (113) \*ボートが 岸から 2, 3メートル とおざかる。

- (114) ボートが 岸から 数百メートル とおざかる。

しかし、ここで問題になるのは、移動前のへだたりとの関係である。(113)の場合、移動前には、それ程のへだたりがないことになろう。だとすると、そのために(113)は不適格になるわけである。したがって、移動後のへだたりに関する指定は、移動前のへだたりに関する指定から余剰的に導き出されることになろう。そのように考えると、「とおざかる」の意義素は次のように仮定できる。

- (ix) 「とおざかる」：〈あるもの・場所とある程度の距離をおいていたものが、そのもの・場所との距離が大きくなるように移動する〉

ところが、諸辞書を見ると、「とおざかる」の記述としては、「遠くにはなれる」というようなものが多い。つまり、移動前ではなく、移動後のへだたりが指定されている。このように考えると、結果の状態は「違い」ということになるので、そのような状態的用法が「とおざかる」にもあってよさそうであるが、2.3.でみたように不自然である。そのため、このような形の記述は疑わしい。

しかしながら、このような状態的用法に関する見方が成り立つかどうかは、今後の検証を待たなければならない。また、本節冒頭の移動前のへだたりに関する議論もまだ不確定であるので、(ix)の妥当性も当然問題になる。仮に、(ix)が妥当でないとすると、諸辞書に見られるような形の記述が必要になろう。本稿では、この問題は未解決の問題とし、(ix)を試案として提出するにとどめたい。

#### 4. 統語的特徴と意味的特徴

- 4.1. 「から」「を」と「はなれる」「はずれる」とおざかる

2.1.でみたように、「はなれる」と「はずれる」は、カラ格名詞句もヲ格名詞句もとり得る。本節では、「はなれる」と「はずれる」がカラ格名詞句をとった場合とヲ格名詞句をとった場合の意味差をみ、2.1.でもふれたヲ格名詞句をとれない場合について説明を与えたい。また、これと関連して、「とおざかる」についても述べる。

まず、次の文をみていただきたい。

- (115) 人工衛星が 木星の軌道から はなれる。

- (116) 人工衛星が 木星の軌道を はなれる。

ここで、(116)の場合、「人工衛星」は、「はなれる」前に「木星の軌道」を回っていないからならぬが、(115)の

場合、そうではなく、「木星の軌道」のそばにただけでも構わないだろう。また、

(117) 飛行機が 空港から はなれる。

(118) 飛行機が 空港を はなれる。

の場合、(117)も(118)も、「飛行機」が離陸することを表わすが、(117)は、それに加えて、「空港」の上空にいた「飛行機」が移動することも表わす。このことから、「を」の場合、「はなれる」前に、ガ格名詞句で指示されるものがヲ格名詞句で指示される領域にいないなければならないということが言えそうである。しかし、次にみるように、単に接触していただければだめなようである。

(119) 太郎が 花子から はなれる。

(120) \*太郎が 花子を はなれる。

「太郎」と「花子」が抱き合っていたとすると、接触していたことになるが、「を」は使えない。次の文の場合も同様である。

(121) 太郎が 壁から はなれる。

(122) \*太郎が 壁を はなれる。

ここで、(119)(118)と(120)(122)との違いは、ヲ格名詞句で指示される領域内での移動があるかどうかではないかと思われる。このことは、「を」が「道を歩く」のように移動場所を示すことがあることと考え合わせると、従来の「起点」の「を」と「経路」の「を」との類似性が示唆され、興味深い。

同様のことを「はずれる」についてみてみよう。ただし、「はずれる」の場合、「はなれる」のように事前に近接しかしていないということはあるので、(119)と(118)、(117)と(118)のような意味差は生じない。しかし、次のように、領域内での移動の有無による適格性の違いはある。

(123) 人工衛星が 軌道から はずれる。

(124) 人工衛星が 軌道を はずれる。

(125) 飛行機が コースから はずれる。

(126) 飛行機が コースを はずれる。

(127) 看板が 壁から はずれる。

(128) \*看板が 壁を はずれる。

(129) ドアミラーが ドアから はずれる。

(130) \*ドアミラーが ドアを はずれる。

しかしながら、以上の仮説に対する反例もある。

(131) ボートが 岸から はなれる。

(132) ボートが 岸を はなれる。

(133) 車輪が レールから はずれる。

(134) \*車輪が レールを はずれる。

(132)の場合、「岸」の領域内での移動があるとは考えられないのに適格であり、(134)の場合、「レール」の領域内

での移動があると考えられるのに不適格である。また、次のような「あたる」の対義語としての「はずれる」の場合も問題になる。

(135) 矢が 的から はずれる。

(136) 矢が 的を はずれる。

(137) 弾が 心臓から はずれる。

(138) 弾が 心臓を はずれる。

この場合、かえって「を」の方が自然であるかもしれない。

この一方で、先のように考えると、なぜ「とおざかる」がカラ格名詞句の代わりにヲ格名詞句をとり得ないかを説明する可能性が生まれる。

(139) 船が 港から とおざかる。

(140) \*船が 港を とおざかる。

つまり、3.2.でみたように、「とおざかる」は移動前の接触・近接を含意しないとすると、ヲ格名詞句で指示される領域内での移動はあり得ないわけである。これは、次の「はなれる」の場合と対照的である。

(141) 船が 港から はなれる。

(142) 船が 港を はなれる。

もっとも、「とおざかる」が移動前の接触・近接を含意しないということ自体まだ不確定であるので、問題は残るが、「を」と「から」の違いが先のようなことが確定すれば、逆に、「とおざかる」の意義素を(x)のように仮定することに根拠を与えるであろう。

「を」と「から」の違いを以上のように考えることについては、ここで挙げなかった問題点もあり、今後の精査を要する。また、他の動詞と共にした場合にもこれが妥当するかもみなければならない。さらに、影山1980のような他説との比較も必要である。本稿では、一つのケース・スタディとして、可能性の指摘にとどめたい。

#### 4.2. 対称関係述語としての「はなれる」

2.1.でもみたように、「はなれる」は「対称関係述語」(cf. 奥津1967a)であり、(vi)のような構文をとった場合、(vi)の意義素は次のように書き換えられる必要がある。

(x) 「はなれる」(対称関係述語) : <あるものともがそれぞれ移動して、接触・近接していない状態になる>

しかし、これは、対称関係述語一般にみられることであるので、(x)は(vi)から余剰的に導き出すことができるであろう。

## 5. 残された問題

本稿でふれることのできなかった問題がいくつかある。まず「はずれる」に関しては、次のような「あたる」の対義語としての「はずれる」である（これは、4.1.でも問題として残った）。

(13) 矢が 的を はずれる。

(14) 宝くじが はずれる。

これは、国広編1982の言うように、「固定が一度も実現していない（p. 32）」という点で本稿で取り上げた用例と異なる。国広編1982は、「結果的狀態の段階（p. 33）」では同じであるので、問題はないとしている。しかし、(14)は問題であるが、(13)のような場合、ねらいをつけることを事前の固定とは考えられないだろうか。また、「それる」との比較も必要であろう。

次に「とおざかる」に関しては、特に抽象的用法の点で、「とおのく」との比較が必要であろう。

さらに、もとより、本稿で取り上げながら未解決のままに終わった問題も多い。例えば、(42)(44)(46)のような「はずれる」の問題、「とおざかる」の移動前・後のへだたりの問題である。なお、(42)(44)(46)の不適合性の説明は、次章のまとめから除く。また、「固定」「接触」「近接」という概念の規定も問題になろう。

## 6. まとめ

以下に本稿の記述をまとめる。

• 「はなれる」

$$NP_1 \text{ガ} \left\{ \begin{array}{l} NP_2 \text{カラ} \\ NP_2 \text{ヲ} \end{array} \right\} \text{ ——}$$

$$NP_1 \text{ガ} \text{ } NP_2 \text{ト} \text{ ——}$$

$$NP_1 \text{ト} NP_2 \text{(ト)ガ} \text{ ——}$$

} 対称関係

<NP<sub>1</sub>が移動して、NP<sub>2</sub>と接触・近接していない状態になる>

• 「はずれる」

$$NP_1 \text{ガ} \left\{ \begin{array}{l} NP_2 \text{カラ} \\ NP_2 \text{ヲ} \end{array} \right\} \text{ ——}$$

<NP<sub>1</sub>がNP<sub>2</sub>に固定されていない状態になる>

• 「とおざかる」

$$NP_1 \text{ガ} \text{ } NP_2 \text{カラ} \text{ ——}$$

<NP<sub>2</sub>とある程度の距離をおいていたNP<sub>1</sub>が、NP<sub>2</sub>との距離が大きくなるように移動する>

<注1> ちなみに、国立国語研究所1964では、「はずれる」は、「2.132 はずれ・損じ」「2.153<sub>1</sub> 込み」「2.155<sub>2</sub> 散り・分かれなど」「2.17 位置・方向」に分類されている。

<注2> この場合の「と」は、「共同格」の「と」ではなく、「対称格」の「と」である（cf. 奥津1967a）。

<注3> ただし、(8)は、(7)と知的意味が同じ場合である（cf. 奥津1967a）。

<注4> 「はずれる」には、次のようなガ格名詞句のみで十分な用法もある。

i) 入歯が はずれる。

ii) 骨が はずれる。

これは、ガ格名詞句「入歯」「骨」から起点が明らかであるため、カラ格・ヲ格名詞句が表現されないと考え、特に一つの構文としてはたてない（cf. 国広編1982, p. 30）。

<注5> すなわち、次のような反応がみられる。（cf. 奥津1967b）。

i) NP<sub>2</sub>ガ X Vi

ii) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ X Vt

（‘X’は任意の要素）

<注6> このような文の適合性については、<注10>を参照。

<注7> なぜ(29)(33)が不適合であるかは、まだはっきりしていない。ただ、このような用法が次のような慣用的な文に由来するため、固定化してしまっているのかもしれない。

i) 部長が 席を はずす。

一方、(30)(34)が適合であるのは、「を」の連続を嫌うためと考えられる。

ii) \*彼が 張込みの刑事を 持場を はずさせた。

また、同じ使役文でも、「を」の連続を生じないニ-使役文の場合と対照されたい。

iii) 彼が 張込みの刑事に 持場を はずさせた。

iv) \*彼が 張込みの刑事に 持場から はずさせた。

<注8> (35)(36)の用例は、国広編1982, p. 31による。

<注9> 目的を表わす「～ために」が、主文の動詞として意志的動作を表わす動詞を要求することについては、奥津1975を参照。

<注10> ただし、(50)～(52)のような文に関しては、許容しない話者もいるようである。また、許容する話者も、文によって許容度の差を認めるようである。例えば(50)～(52)の場合、この順で許容度が下がる。これは、(50)の「持場」、(51)の「詰所」、

⑤2)の「部屋」の順で空間が広くなることと関係があるようだ。

もともと、このような用法は、〈注7〉でも述べたように、次のような慣用的な用法を拡大したものと考えられる。

i) 部長が 席を はずす。

このことが、⑤0-⑤2)を許容するかどうかの個人差を生むのだろう。また、i)の「席」は、⑤0)の「持場」より空間が狭いことから、⑤0-⑤2)の許容度の差も、これと関係すると考えられる。

〈注11〉あるいは、「はなれる」の場合の状況でも、「はずれる」が使えりとする話者もいるかもしれない。これについては、後に述べる。

〈注12〉ただし、2.3.で述べた状態的用法は別である。また、5.でも述べるように、次のような用法は問題になる。

i) 矢が 的を はずれる。

〈注13〉⑦6)と比較して、次のi)のような文の不自然さは興味深い。

i) ?惑星が 恒星を回る軌道から はなれる。

ii) 惑星が 恒星を回る軌道から はずれる。

「人工衛星」より「惑星」の方が、「軌道」に「固定」されているととえやすいのだろう。

〈注14〉しかし、国広編1982において、この例文は、「期待」という特徴を出すためのものなのか、「固定」という特徴を出すためのものなのかははっきりしない。

〈注15〉ちなみに、「新明解国語辞典第三版」の「はずれる」の記述には、「正当な・(期待さ

れる)位置」という特徴が、「岩波国語辞典第三版」の記述には、「正常の場所」という特徴が含まれているのに対して、「学研国語大辞典」の記述には、そのような特徴が含まれていない。

〈注16〉ただし、⑫2)(⑫4)(⑫6)の不適合性は、別に説明しなければならない。

〈注17〉「固定されていない状態になる」ということで、事前の固定された状態は含意される。

〈注18〉ただし、「とおざか」り始める直前まで、「目の前にいた」「建物の中にいた」と解釈した場合である。

〈注19〉「接触・近接していない状態になる」ということで、事前の接触・近接した状態は含意される。

〈注20〉なお、「とおざかる」と共起する距離の副詞は、移動後のへだたりを示す。

〈注21〉「新明解国語辞典第三版」は「遠くに離れる」、「岩波国語辞典第三版」は「遠くへ離れる」、「学研国語大辞典」は「〔ある場所から〕遠くはなれてゆく」である。

〈注22〉あるいは、⑬⑩)の場合、「岸」を「岸」の付近の水面も含めて解釈しているのかもしれない。また、⑬⑩)の場合、「はずれる」のは「レー」に直角の方向であるので、この方向には、「レー」の領域内での移動はないと考えられるかもしれない。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生 3  
歳～ 埼玉県朝霞市  
(東京都立大学大学院学生)

## またぐ・またがる

藤 本 泉

### 1. はじめに

「またぐ」「またがる」は、国立国語研究所1964で、「2.339 足の動作」の項に分類されている。本稿ではこの二語について、用例を観察分析し、両語の意味の違いを考えてみることにする。また、今のところこの二語について分析した論文を見出しはしていない。

「またぐ」「またがる」は両語とも人間の動作という

観点が基本と考えられるので、動作主体が生物の時は人間を代表とする。また、この分析で使う、対象という語は、「～をまたぐ」「～にまたがる」のような「～」にあたる部分を指す。

### 2. 「またぐ」

#### 2.1. 継続と瞬間